



写真提供：西原 功氏

抱起こす手に紫陽花のこぼれけり 正岡子規

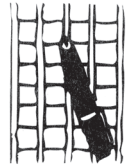
紫陽花を美しいと眺められる

あたりまえの日々がなんとありがたいこと

世界中があたりまえを取り戻せますように。

「自分史」は歴史の証言者 …………… 馴田正満	2	出版物紹介・寄贈図書紹介 ……………	7～8
おのころじま奮染記 19 …………… 田島征彦	3	飛鳥だより ……………	9
いろいろかいる 三 …………… 安藝真一	4	印刷屋さんの「すったもんだ」 …………… 永野正将	10
新聞余話⑪ …………… 大澤重人	5	わが家の太郎 ④ …………… 永野雅子	10
キルギスタンからコンニチハ ⑦ …………… 氏原名美	6		

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。



「自分史」は歴史の証言者

馴田 正満

（株）飛鳥が「自分史」の出版を始めたのが1986年というから、もう34年になる。当初は自分史の書き方講座を開催していた。この間にいったい何人の「自分史」が飛鳥から出版されたのだろう。多くは著者の縁者知人に配布され図書館に納本されたと思うが、一般の人が手にする機会は少ない。しかし、そのなかには、日本の近代史のすき間を埋めるといふか、近代史に新たに書き加えるような事実が、さりげなく書かれていて驚くことがある。

たとえば矢野元子さんの『昭和生まれのモッチャンです』（2016年発行）には、東京の淀橋第四国民学校6年生だった著者が群馬県草津町に集団学童疎開したさいの所持品の一覧表が載っている。母親のメモに基づいているので間

違いはない。具体的には「ふとん袋」の中に、しきふとん1枚、かけふとん1枚、ねまき、はんでん、毛布、まくら、下駄、ざぶとん、ランドセル。「トランク」の中に、雨用マント、セーター、たび、赤毛シャツ、運動シャツ、メリヤス、はらまき、月経帯、はし1・食器皿2・おわん1・ゆのみ1、黒メリヤスブルマーほか13点。「いぐさの手さげ」の中に、ふりかけ、おべんとう箱、そろばんほか14点。「リックサック」の中に、裁縫箱、おもちゃ箱、ハンケチほか9点。「薬のバスケット」の中に、オリザミン、キナピリン、マキロなど。学童疎開についてはいくつもの研究があり多くの体験談が残っている。だが疎開児童が何を持って行ったかの詳細な記録は見たことがない。貴重な歴史的証言である。

また、山岡茂太郎さんの『和紙と共に七十五年』（2007年発行）には、和紙で特攻機のガソリントランクを作った記述がある。

「その後、ガソリンを入れる紙の袋作りの指令を受けました。（中略）特攻機へ着けるガソリンを入れる袋と聞き、えらい仕事を頼まれたものだとはびっくりしました。ガソリンの袋の製作はそんなに難しいものではありません。液体が漏れないことが第一で、気圧の差はあまり考慮しなくてもよいけれど、特攻機へつけるために、重量の少ない物をということでした。中身はガソリンを使ったら空になりますし、もしガソリンが残っていたらそのまま敵機に突っ込むということでした。ガソリンは、飛行機の翼のちょうど真ん中位にぶら下げます。終戦後に、鹿児島

知覧を訊ねて記念館を見学した時に、資料を見て、私の作ったものがガソリンを積んで敵機に突っ込んだという記録が残っており、大変驚きました」。

和紙で風船爆弾を作った記録はたくさんあるが、ガソリントランクの証言は読んだ記憶がない。これまた貴重な証言である。

飛鳥の会議室には34年間に出版した「自分史」が並んでいる。そのなかには他にも貴重な歴史的証言が含まれているのではないだろうか。（平和資料館・草の家 研究員）



(3) かから版

小学3年の頃だったと思う。ぼくらフタゴの兄弟は、寒くなる季節には、山にワナをかけた。敗戦からまだ5年も経っていない。いつも腹を空かせていた。もちろん、当時でも野鳥を無断で捕ることは禁じられていたのかも知れない。しかし、竹のヒゴを曲げて、ヤマ糸を張ったものに、馬のしっぽの毛を輪にして下げたワナは駄菓子屋で売っていた。ハト、ツグミ、ヒヨ等が捕れることは滅多になかった。せいぜい、目白や鶯など、雀よりも小さな小鳥が時たまかかっていた。それでも、ぼくらは大喜びで、可愛い小鳥の羽根をむしって、コンロに火を熾して炙った。裸になった小鳥は貧弱な身であわれたが、香ばし

おのころじま 大奮

ふんせんき

田島征彦

19. ヌエは裸のまま闇に消えた

い匂が空腹にはたまらなかった。肉は、ほとんどないけれど、頭から小さな足まで、バリバリと骨ごと味わたったのだ。

山の中に、野鳥が通りそうな場所を捜して、枯木で廻りを囲んだ中に、南天やくちなしの実を並べた。入口にワナを差しして、鳥がうまく首をつっこんでくれるように工夫した。

学校から帰ると、ぼくたちは、すぐに前日仕かけておいたワナの成果を見廻りに山へ上った。冬の山の中は、すぐに暗くなった。うす暗い雑木の間を、2人はドキドキしながらワナを捜して歩いた。すると、

仕かけておいた所の囲いの枯木が散乱して、ワナが失くなっていった。良く見ると、たくさん羽毛が散って、茂みの奥から、羽根をバタツカせる音がする。黒っぽい、かなり大きな鳥が、ワナを身体に着けたまま暴れている。

「ヌエだ!!」



2人は同時に叫んだ。

ヌエ。それは千年も昔、災害の続く京の都で、夜ごと不気味な鳴き声を上げて、人びとに恐れられた怪鳥である。ぼくらは、トラツグミをそう呼んでいた。

2人の胸は踊った。生まれて初めての大きな獲物だ。力いっぱい首を絞った。絶命させないと逃げられては元も子もない。それから羽根をむしった。暗い山道を、2人の間に抱きかかえられて、ヌエは裸にされた。裸になっても、鶏ほどではないが、チャボぐらいはある。両親も喜び、褒められるにちがいない。

その時、ヌエは大きく眼を見開いたのだ。裸の羽毛のないヌエの頭に光る眼は恐ろしかった。2人は同時に力を緩めたのだろう。ヌエはぼくらの手をすり抜けて、ドタドタと山道を走って行った。2人は、血眼で這い刷りまわって、裸の鳥を捜したが、かなりの時間が過ぎてても、ついに捜し出すことはできなかった。

あれから70年以上も経った。高知県吾川郡芳原村磯戸の集落はどんなに変わっただろうか。ワナをかけに行った山は切り崩されて、平和団地になった。

たじま・ゆきひこ(染色家・絵本作家)

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じこくのおうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。二〇一五年『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。沖縄県高江集落に通って『やんばるの少年』を制作。昨年5月完成した。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

い ろ ろ か い ろ

その二十七



夏のこと

安藝眞一

時の流れが速い。いくつもの年を迎え、出来事も、想い出も、まとまらぬ内に重なり合って流れていく。季節も変り目が判らぬままに、引き裂かれる様に急ぎ足で、

消えていく。

五月が来る。間違いない夏がやって来る。年明けは早々と終り梅の花の咲く頃に、何やら新型コロナウイルスが発生した報らせが走るうち、桜が咲き、例年の様に、日本中を開花の風が吹くと、追うようにウイルス伝染の雲が取り囲み、春が見えなくなつた。花見無用の禁令が出て、テレビの画面が新聞紙面でしか桜に出会えない日々のうちに春が枯れ、コロナの灰色の雲が地上に降りて来る。

せめても夏、と季節の変り目を待っている身に、季節は平然と例年のごとくやって来る。

卯の花の匂う垣根に——と唱い出す詩句は、なだらかに、ほととぎす早やも来鳴きて——とあたりを見まわすように告げる口調が、やがて、——夏は来ぬ。——とゆつくりと過去形で終わる。はじめて歌ったころは、この「来ぬ」という云いまわしが不思議で、日常の言葉の「来た」でなくて「来ぬ」に、おどろいたが、やがてその方が歌になると納得する。それは春が来たとは段違いに決定の力が強く、さらに過去形の「来ぬ」の姿が朦朧たる春のかすみをキツパリと打ち切り捨てる清々しさが、見てと

れるのである。いつの間に来て鳴いているホトトギスが——忍び音洩らす——と微細な表現を重ねてはいても、やがて「夏は来ぬ」と季節の身を立てている。

私が好きなのは二番の歌詞で五月闇、螢飛びかい——水鶏鳴き卯の花咲きて——早苗植え渡すのくだりである。往時、日中戦争の頃、京町商店街で生まれた私の商家は、敷地の四割程が「店」で残り六割の内、半分が居宅、半分が中庭であつた。庭もそれなり広く白壁の土蔵が三つあって、中には商売道具の漆器の山が整然と納められていた。分厚い白壁に夕方になると夕陽があたり、どこからともなく蝙蝠の群れが飛び来たつて土蔵のまわりを縦横に飛び交う影が白壁の夕陽の紅を掃いて、重なる。やがて陽が落ちて暗くなる。と、暗がりの奥は深く、次第に闇に変わる、誠に五月闇とはこの事かと見つめるうちに、青白い光が、ゆらりと飛ぶ。やがて、いくつもの青い点が呼び出された様に庭を這う。螢の群れが出て来たのだ、それもこの夏の季節の毎晩のこと。祖父が植木鉢に植えた草を手渡ししてくれた。螢草、と祖父は云う。鉢の上こんもりと紡錘状に

水々しい緑の草が生えそろう、その上から赤銅の針金で造った紡錘形の網ぶたをかぶせる。ピタリと寸法が合う。夜になると庭の螢をつまんで網ぶたを取り草の中へ放す。三匹、六匹、七匹と。網をかぶせた上から霧吹きで水を吹き眺めると螢はよろこんで上へ下へと歩き光を放つ。それが私にとって最上の宝もので、寝る時は枕元まで運んで眺めた。暗闇のなか、螢の光は明滅し本も読める程であつた。朝になると放してやり、夜になると、新しい螢と取りかえて枕元に置く。いく日も続いた。

街中でそんな出来事が、今となつて夢の様に想い出される。虫も鳥も蝙蝠も、すぐそこにあつた。空襲で焼け落ちた我が家の庭に、母が畑を作る。それを手伝いながら、あの日の螢籠の鉢を探す。草は焼けても、あの紡錘状の赤銅の網は残つてはいまいか。畑に行くたびに探したが見つからない。家が焼けた事よりも螢籠が消えた事が恨めしかった。夏が壊れた。

了

「まだ質問があります」

女性記者からの呼びかけに応じず、午後六時台に早々と帰宅する首相が批判を浴びました。二月二十九日の新型コロナウイルス対策の記者会見です。「私は逃げない」と大見得を切りながら、質問から逃げたと報じられました。

生中継を見ていた私は、官邸クラブの記者たちの、生ぬるい質問にがく然としました。新聞社内では優秀とされる政治部記者たちが、手元のペーパーを読んで答えられる質問しかしなかったのです。記者クラブの弊害を感じました。新聞社やテレビ各社の便利な互助組織ですが、自分たち記者の首を締めていないでしょうか。

記者クラブは高知県内にもあります。県庁、高知市役所、県警などの庁舎内にあり、競合するはずの各社が机を並べています。当局や外部の人や団体などが記者発表（不祥事を除けば、広報宣伝がほとんど）したいときは、輪番制の幹事社がお膳立てをして、会見を開きます。いきなり細かいことを聞いても、数字などを答えてもらえないかもしれません。そうした事情から、幹事社などの質問内容を事前に提出することがあります。



緊急事態宣言の延長を発表した5月4日の首相会見。
「PCR検査を本気で増やそうとしているのか」という
質問は心に響いた

新聞余話 ⑪

大澤 重人

記者の「背」を見つめよう



す。当局の広報担当とは日々顔を合わせる仲で、頼まれたらなかなか嫌とは言えません。その度が過ぎると、双方のなあなあになります。

二月末の首相会見では、幹事社二社が質問した後、一般質問を三社からだけ受けました。質問を通じて、首相が手元の紙を見て答えていたことから、挙がった手の中から誰を指名するかを含めて、全部出来レースだったのではないかと疑いが持たれました。

見えないウイルスに怯える国民が、少しの安心感を得たくて見守った会見です。それが茶番劇だと見透かされ、SNSなどで批判が渦巻きました。次の三月一四日の首相会見では、内閣広報官が質問を打ち切ろうとした後も質問に応じ、計一〇問の一般質問に答えました。少しは前進ですが、回答に納得がいかに重ねて質問するとは認められていないようで、言い放しで済まされています。官邸クラブはどうして改善を申し入れないのでしょうか。

記者会見は真剣勝負の場です。本当に怖い。会見者の胸のうちや、人間性までも容易に映し出し

ます。綺麗事を言っても言葉に重みがないと響きません。官僚が準備した文章の朗読ならなおさらです。逆に質問する記者のセンスや能力もあぶり出されます。そんな聞き方ではお茶を濁されるに決まっていますという質問はご法度です。答えに窮して思わず本音が飛び出すような質問を、いかに短い言葉でぶつけるか。「コロナ終息が見通せない中で、改憲議論を申し上げるのはどうなのかという意見もあります」（五月四日の首相会見に対する質問）などと、第三者の意見に仮託せず、「自分はおかしいと考えるが」と問い詰めてほしい。現役時代にそんな質問ができなかった私が言うのもなんですが……。

記者が権力者に自由に質問できるのは、新聞社が偉いからではありません。国民の知る権利を代弁しているからです。

知りたいことを記者が聞いてくれるか。編集されたニュースではなく、会見の動画に自分なりに向き合ってみてください。

背中を押してくれる人が増えると、記者の質問は鋭くなります。

（渡来人歴史館専門員、
元毎日新聞高知支局長）



キルギスタンからコンニチハ ⑦

COVID-19 パンデミック、キルギス事情

氏 原 名 美

うじはら・なみ

越知町出身。北海道大学卒。キルギス共和国ビシケク国立大学(旧称ビシケク人文大学)教授。「キルギスタン」はキルギス共和国の通称の一つ。

ことだし、そろそろ大学に戻ろうと考えていたところ、カザフ、ウズベクに続き、キルギスでもとにかくに外国籍者に対する入国制限が厳しくなった。入国後は二週間米軍基地跡の施設に隔離されるのだそうだ。キルギス行きはしばらく様子を見てから、と思い直した。大学では今年も日本の大学院生をインターンとして迎えるべく準備をしていたが、止むなく受け入れは中止せざるを得なくなった。二月二十八日にはキルギス首相府から「三月一日以降、日本からの入国を拒否する」との発表があった。大学に、当分は戻れそうもないと連絡した。

昨年九月から大学は無給のボランティアにしてもらった。授業は担当せず、日本の協定大学とのやりとりや学生の研究指導をテレワークで行えばよいことになったので、長期休暇をとって昨年暮れの法事に合わせて一時帰国し、頼まれた翻訳仕事の合間に「子やらい」ならぬ孫守をしていた。

三月に入ると、キルギスに限らず国際便の大幅減便や運航停止が相次ぎ、商用や観光で外国に出かけていた人々は、渡航先から本国に戻ってこれられなくなった。キルギスも三月二十五日に非常事態を宣言し、マナス国際空港を閉鎖した。陸路も国境封鎖され、外国人は入国禁止、キルギス国籍者は出国が制限されて、四月から日本に留学するはずだった学生たちは留学ビザと航空券を手にしたまま日本どころか許可証なしでは家から

外へ出られなくなった。

大学は立ち入り禁止となり、学生は自宅でオンライン授業を受けることになった。集会やイベントは禁止され、日本語弁論大会も、三月に開催される予定だった国内大会は九月に延期された。中央アジア大会は、今年は開催担当国ウズベキスタンの首都タシケントに中央アジア五カ国代表が集うはずだったが、日程が決まらない。各国の国境封鎖が解除されるかどうか、移動手段が確保できるかどうか、出場代表者に出国許可が出るかどうか等々、問題が多すぎて東京五輪と同様、実施できるかどうか微妙だ。すべてはパンデミックがいつ終息するかにかかっている。

昨日、キルギス人二十数名が成田から帰国の途についた。三月以降、フライトがごとごとくキャンセルされて、二ヶ月以上も日本滞在を余儀なくされていた人たちが、キルギス大使館が交渉して、カザフスタン政府が自国民を日本と韓国から帰国させるために準備した特別機に便乗させてもらったのだという。カザフのアルマトイ空港で降りて、あとはチャーター

バスで国境を越えることになっている。

日本に留学予定だった学生たちだが、協定校が留学時期を秋に延期してくれた。今のところ留学辞退を申し出たものはいない。しかし、交換留学は、授業料は無償でも生活費は自分で工面しなければならぬ。パンデミック後の日本でアルバイト先を見つけるのは容易ではない。経済的理由で留学を諦めたりはしないだろうか。これから予測される長い経済停滞が若者の学ぶ意欲と夢を奪わないことを願わずにはいられない。

二〇〇一年から十九年、キルギスの学生を日本に送り出してきたが、これからは日本にやってくる若い世代を出迎えてサポートする役に回れたら幸いだ。キルギスと日本の青少年交流の橋渡しもしてみたい。「キルギスタンからコンニチハ」「日本の国からこんにちは」「互いの挨拶が響き合うキルギスと日本の若者たちの出会いが実現したら、素敵だ。」

(五月十四日 記す)



安岡の家の歴史を解体・復原する

安岡 正俊



A5判278頁＋別冊資料

私家版

(7) かわら版

香美郡（現香南市）香我美町山北の父の生家が、平成十七年五月に国の重要文化財に指定されました。これらの建物などが文化財建造物保存協会殿の設計監理により修理工事が平成二十四年六月から開始され、各種の業者殿のご協力により令和元年十二月に竣工しました。これとは別に本門、本門脇の番屋（昭和三十一年に売却・

移築したのを譲り受け）を平成二十二年十二月に復原しました。重要文化財建造物の主屋の修理保存工事は当初、柱を残す半解体工事の予定でしたが、工事を進めると柱の傷みが激しいことが判明、柱も取り外す全解体工事で行うことになり、敷地の試掘調査も行いました。

工事実施前は主屋座敷部の障子框の墨書文政十一年から、主屋の建立はこの時期と考えられていました。今回の解体でさらに古い文化六年と職人名が記載された墨書が座敷部から、文化五年の墨書が居室部から出て来ました。居室部は礎石などの痕跡から移築した建物であることが判明しました。

系図には明和八年にこの地に初代が住み出したとあり、建物の墨書と符合しません。

座敷部の下に整地面、そこに胞衣壺（生まれた子の健やかな成長を願い臍の緒を入れた壺）が埋められており、離れた場所に炉の跡などがありました。現在の米蔵の北側に桐木が埋められた高さが約三メートルの石垣があり、湧水が流れ出ていて、その付近を水場、料理場とした痕跡がありました。これらは主屋建立時期より古く、敷地などの生活記録から主屋建立以前に住み出したことが判明しました。

北側の石垣は西に回りこみ、その上に家を見下ろすように、寛永以前と推定される線刻地藏・観音の二体と、埋葬跡の石グロがありました。誰が埋葬されているのか、家の先祖であれば誰か。その謎解きで家の系図が藩へ提出した先祖書と異なっている新たな謎が出て来ました。

謎解きとは別に、修理保存工事で発見した墨書の確認、建物構築時期の探索もあり家の古文

書を見直しました。この調査で建物改築時期と、職人の生活状況、意外な情報が出て来ました。

謎解きの過程、調査過程で見付けたこと、藩政時代の旅日記、明治維新前後に若く亡くなった先達とその周囲のことを本「安岡の家の歴史を解体・復原する」に書きました。別紙に試掘結果、古い瓦、古銭などを紹介しています。

左写真の上側は復原後、下側は同一方向の七十年前で経年の重さを感じます。復原された建物は残りますが、消えた生活は文書に残す思いで書きましたが、七十年より更に奥からの歴史を復原する難・楽がありました。



！ 出版物紹介



森井淳吉名誉教授 編集

高知短期大学と私

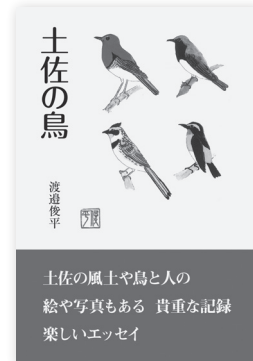


発行・編集：森井淳吉
A5判 208頁
非売品

働きながら学ぼうとする県民・市民の要求によって創られた大学、高知短期大学が今年2月9日、開学式を迎えました。

森井淳吉名誉教授の「『高知短大と私』というテーマで、感じたこと、思っていること、考えていることを書いていただきたいのです。そしてそれらの記録を一つの『遺産』として、心ある人たちに残したい、と思っています」という呼び掛けに応えた67名(学生編56名、教員編11名)の思いが一冊の本になりました。

土佐の鳥



著者・発行者：渡邊俊平
四六判 150頁
定価：1,727円(税別)

昭和三十年代の中山間地域の子どもの達の楽しみは野鳥を捕り、食べたり売ったりすることとで、著者もそんな子どもの一人でした。

そのような環境で育ち、子どもの頃から鳥の研究を続けていましたが、次第に鳥の種類や数が激減し、絶滅危惧種が増え、さらには野鳥の捕獲飼育が禁止され、日本の飼鳥文化までもが消えてしまったことを惜しみ、研究を始めた頃からの鳥と人の世相風俗、土佐の風土などを随筆「土佐の鳥」として、俳誌「蝶」に連載されました。それを一冊にまとめ、後世の資料の一助になればと願い上梓されました。

手塚治虫の戦争反対の情熱



著者：藤原義一
A5判 138頁
定価：1,000円(税別)

すごい題です。が、1928年生まれの手塚さんは青春時代が戦争です。次は、漫画家としての手塚さんの思いを端的に表現した彼の文章です。

『生命(いのち)を大切にしよう!』

この主張は、「自然の保護」「生きものへの賛歌」「科学文明への疑い」「戦争反対」などのテーマにかえて、どの作品にも、訴えたつもりです。

僕は大きな戦争を、少年時代に体験してきました。だからこそ、生きていくということのありがたさ、生きることの尊さを、みなさんに訴えたいのです。それと同時に、生きていく苦しみも読みとってほしいと思います。』この主張で終始一貫した多くの手塚漫画や、社会生活の紹介です。

カラーグラビアの「鉄腕アトム」「リボンの騎士」「ジャングル大帝レオ」「ブラックジャック」「火の鳥」は著者藤原さんが昨年宝塚市の手塚治虫記念館で撮影したもの。

寄贈図書紹介

ありがたうございました。

- 孫たちへの証言／(株)新風書房
- 学童疎開を語り継ぐ／(株)新風書房

- こころの花束／小嶺照榮
- あ、死と生の釜ヶ崎／竹田繁司
- 大阪春秋／福山琢磨

中内 清子さんのこと

「スガちゃん」と呼んでいました。

当時「有限会社 四国写植」だった当社に入社してきた彼女は、小柄で可愛い、それでいて芯の通った女性でした。昭和五十七年のことです。

当時は、文字を写真植字(写植)といって、一文字一文字印画紙に打つ時代だったのです。お客様から預かった手書き原稿を、マガジンに装填した印画紙に印字し、暗室で現像する手間のかかる作業の連続でした。当然、勤務時間は残業が当たり前の毎日でした。

そんな中、彼女はどんどん力を発揮していききました。

時代は電算写植、パソコンと、業界の変革は目まぐるしく、絶えず先を見て対応していかなければならない時に、社員をまとめ、お客様の要望に応える姿勢を貫

いてくれました。ここ数年、病と闘いながら仕事を続けてきました。今、改めて彼女の存在の大きさを感じています。

スガちゃん、あなたの笑顔、真剣に仕事に向き合う姿勢、ユーモアのある会話を思いだしては、早すぎると別れに夢であってほしいと思う毎日です。

頑張り屋のあなたが残してくれた、飛鳥の宝を私達も守り、育てていきます。

ありがとうございます。
安らかにやすみください。

永野 雅子



2020年2月25日 ご逝去
1982年7月 入社
出版室室長

手作りマスク



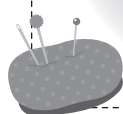
新型コロナウイルスが大流行し、社会、経済が混乱している中、マスク不足が社会問題になりました。

工場内全員がマスクが無いと嘆いていたところ、常務が「手作りマスク」を作ると言ってくれました。全員が口を揃えて「助かった」と…。

また「夏用のマスクも作らないとね」と言ってくれてとても感謝しています。この場をお借りして、本当にありがとうございます。(氏原 記)

友人からマスクの作り方を教えてもらったのをきっかけに始めました。これが結構楽しくてハマっています。生地見本の端切れ布があつたので、いろいろの柄で作ってみました。

などと言いつつ…。
今、夏バージョン作りに大忙しの毎日です。(常務 記)



印刷屋さんの「すったもんだ」

代表取締役 永野 正将



本年2月頃「おやっ？」と感じていた新型コロナウイルスは、3月に入って急速に猛威を振るい、まさかここまでの影響を及ぼすとは思ひもよりませんでした。当社もそれなりに影響を受けておりますが、業種によっては甚大な被害を受けられている皆さまも数多くいらっしゃる、心から頑張っ乗り越えていただきたいと願うばかりです。

先日、何気なくテレビを見ていると、ある占い師が「5月以降に世界的に価値観が大きく変わってくる」と言っておりました。恐らく今回のコロナの事を示しての発言だと思いますが、確かに今回の件で様々な場面で今まで当たり前だった事を考えさせられる事も多く、自分自身「価値観」は多少なりに変わってきていると感じます。

これまでも要所所で人の価値観は変わってきたと思いますが、改めて経営者として「どんなに価値観が変わろうとも必要とされる企業でありたい」と強く感じた次第です。

新型コロナウイルスが一日も早く終息し当たり前であった日常が返って来ることを祈念しております。

追伸：今日に至るまで当社がお客様に必要とされる価値を築き続けてくれた、故 中内清子さんに心よりの感謝と哀悼の意を捧げます。

わが家の太郎

48

寿命

永野 雅子



五月晴れの爽やかな朝、こんな日は何となく気分がいい。

朝一番の行事、読経を始めると間もなく太郎の鳴き声。何度も中座をして庭から家に入れたり、安定剤を飲ませたりしているうちに、さつきまでの爽やかな気分はどこへやら、だんだん腹が立つてくる。

朝、目覚めた時から大声で「ワン、ワン」と間断なく鳴くものだから、ご近所にも気兼ねで、散歩に行つて疲れたら眠るかなと連れ出す、帰つてきて一時すれば同じこと。

いくら認知症でもこれほど鳴いて疲れないのかと思うほど。足はよぼよぼなのに、外に出て庭をうろついては脱走を試みる。先日また太郎の声が遠くに聞こえるので探すと、倉庫とお隣の間の狭い空間に体を挟んで、大声をあげていた。

どうやってこんな所に入れたのか調べてみると、倉庫と塀の間のフェンスを下から持ち上げてくぐり抜け、前へ前へと進んで行ったようで、目が見えない分怖いもの知らずで、とんでもないことになる。

息子曰く、

「このまま行くと、ひょっとしたら案外20歳まで生きるかもしれん。この間も息をしゅう

かと心配するほど弱っていたのに、また復活したろう」

7月で15歳になる太郎は何を思っているのだろう。人間の歳でいえば90歳を超えた太郎を、食事に薬に通院にと、手を尽くしているけれど、それが太郎の幸せなのかと、ふと思ふ。

同じく愛犬のいる友人に聞くと、「病院も薬もやめている。もう自然にしてあげた方が、お互いのためじゃない?」

ということだった。元気でいればこそその長生きで、頑固おやじのような太郎をご近所に気兼ねしながら世話をするのはこちらも疲れ

夫が逝つて10年、未だに私を主人と思つてくれない太郎に、「何なのよ」と思うこともあるけれど、考えてみれば大病をした夫の気持ちや癒やしてくれたのは太郎だし、「わが家の太郎」を心待ちにしてくださる方たちにネタを提供しているのも太郎。

ま、しばらくは今までどおり、お世話をさせていただきますように。

太郎、お手柔らかに。